表』の表をよく利用する方々は，前著に書かれた解説と編者たちの基本的見解を読むべきである．

本書には，「古地震研究会」の仕事の一応のしめくくりの気持が込められているという．現在はこの会につづくような学際グループがないから，寂しいことである．本書を含む3冊を熟読含味して，このような仕事の継承発展を考えることが，次世代に課せられた急務であろう．

〈東京大学出版会，1995年7月，A5判，306頁，5974円〉

［いしばし　かつひこ　　建設省建築研究所国際地震工学部応用地震学室長］

■ 書　評 ■

●歴史地震研究の王道を示す労作

萩原尊禮 編著　山本・太田・大長・松田 著

古地震探究

海洋地震へのアプローチ

評者 **石橋克彦**

間違った歴史地震像を正そうと20年近く学際共同研究をつづけてきた「古地震研究会」の，3冊目の本である．同会は，同じ出版社から，82年に『古地震』，89年に『続古地震』を出している．ちなみに，89年の前著も本欄（第7号）で評者が紹介した．

今回は，6章から成る「第Ⅰ部：各論」で，1096（嘉保3＝永長1）年と1099（承徳3＝康和1）年の東海・南海地震，1331（元徳3＝元弘1）年の紀州千里浜が隆起したとされる地震，1361（正平16＝康安1）年の南海地震，1596（文禄5＝慶長1）年の伏見地震，1605（慶長9）年の東海・南海津波地震，1711（正徳1）年の讃岐地震をとりあげている．また「第Ⅱ部：史料編」には，近世中期以降の7個の地震の新史料11編が掲載されている．

広く利用されている『理科年表』の「日本付近のおもな被害地震年代表」とその主要な根拠である『新編日本被害地震総覧』（宇佐美龍夫著）の誤りを正すという姿勢が鮮明である．各地震とも，まずそれらの記述を紹介し，つぎに厳密な史料批判と丹念な現地調査や詳細な考証によって誤りや不明な点を明らかにして，最後に編者が地震学的に総括している．1331年と1596年については，地形学的な調査や検討も加えられている．史学的な部分では，史料の扱い方の基本に関しても従来のやり方をかなり厳しく批判しているが，歴史地震に関心をもつ地震学者は傾聴すべきだろう．

7個の地震のうち，1331年と1711年のものは消去すべきとされたが，妥当な結論である．1096年と1361年は従来の地震像が基本的に追認されたが，1099年を南海地震とすることを留保している慎重さは，評者も見習いたい．前2著でも論じられた1596年地震については，鳴門の地震隆起を虚構とした論証が興味深く重要である．しかし，1099年地震の史料の吟味では“自己の権利主張にかかわる内容で，その根拠として，はじめから当時の人々に認められない地震を創作するとは考えられない”と判断しているのに，ここではその種の議論がまったくないのは釈然としない．また，この地点こそ1331年の千里浜にたいするような地形学的調査を加えてほしかった．父尾断層や有馬・高槻構造線のトレンチ調査結果の検討もなされていないので，この地震は本書で決着がついたとは言えないだろう．

1605年地震については92頁を費やして詳述しており，各地の状況が最大限に近く明らかにされた意義は大きい．しかし，これが津波地震であろうという本質は評者も含めてすでに何人かが論じており，関係者の間ではほぼ見解が固まっている．評者はむしろ，関東で大地震という記述の真偽が，江戸の開発状況，畿内との情報ルート，「大宮神社古記録抄」ほかの史料批判などを通じて詳論されることを期待したのだが，この点はほとんど触れられていない．また，外房の「八積村元台田家文書」や今村が指摘した「伊豆半島地震史料」が俎上にのぼっていないのも物足りない．

本書は，必ずしも最近の研究を広く見渡しているわけではない．たとえば1096年の津波では，都司が『歴史地震』第9号で述べた沼津の伝承も検討してほしかった．また1605年津波に関連して，八丈島の谷ヶ里（やつがさと）の現在地を本書が初めて明らかにしたというが，『歴史地震』第7号で宇佐美・吉井が報告しているから，言い過ぎという感じがする．そういう点で，本書はかなり個性が強い．また，文科系の専門書的な雰囲気は否定できないし，“重力断層”“走向ずれ断層”という古典的用語が使われていたり，地震時地殻変動としての沈降という観点が希薄だったり，地震計のない時代の巨大地震の震源が点としてどこかという発想が強かったりと，全般に，現代地震学とはやや違う閉じた世界という感じを受ける．

しかし，地震現象の理解に必要不可欠な歴史地震研究の内実が一般には十分理解されていなくて，歴史地震を恣意的に活断層にあてはめたモデルが一部でもてはやされている昨今，歴史地震の実像に迫る作業がいかに大変かを知るために，是非多くの人々に本書を読んでほしいと思う．なお，「まえがき」にあるように，概論的なことについて既刊の2冊を見るとよい．とくに，『理科年